

知恵の樹

No. 149 2010. 4. 21

町田の図書館活動を
すすめる会

事務局：町田市森野 3-1-12 増山方
〒194-0022 FAX 042-722-1243



やはり、もっと身近に図書館が欲しい！

～ 地域館こそ市民の図書館 ～ 山口 洋

身近に図書館があるという当たり前の状況に浸っていると、図書館が身近にあり生活の一部になっていることを意識することさえない。本来公共図書館とはそうあるべきものであろう。

ところで町田には図書館が6館ある。そのうち、皆さんは何館利用しているだろうか。たまに中央館に行くこともあるかもしれないが、普段使う図書館は、自宅から近い、通勤、通学の途中など身近な図書館、つまり日常の利用は身近な地域館である。

町田の場合、この地域館には大きな差がある。たまたま市内各館を見学する機会を得て、普段は見ることの出来ないバックヤードまで見せていただいた。最も新しい**金森図書館**(1499 m²)は広々としたスペースに多くの本が行儀良くならんでおり、バリアフリーに配慮も行き届いている。**鶴川図書館**の場合は、259 m²のスペースにところ狭しと本が並び、ぎゅうぎゅう詰めである。**木曾山崎図書館**も320 m²あるものの、本と人がごった返している。**さるびあ図書館**は1234 m²あるものの例えば子どものコーナーには段差がありベビーカーでは入れない。古い建築の場合、バリアフリー思想が欠如してしまうのは致し方ないかもしれないが、進行しつつある高齢化と子ども読書推進の観点からすれば、考えなければならない。**堺図書館**(429 m²)は出来るだけ多くの本を利用者に見えるように提供しようとわずかなスペースも無駄なく配架しようとしている。そして各館に共通するのは、リクエストの多さと車の利用者が多いことであろう。リクエスト本の多さは、インターネットから手軽にリクエスト出来るよう

になってから爆発的に増加し、これは全国の公共図書館共通の現象でもある。その中でも、取り置きのリクエスト本をどこに置くのかという点で各館とも苦労がある。特に鶴川図書館の場合、取り置き棚が事務室内を占拠し始め、職員は脇へ追いやられているのが現状である。他館でも異口同音で、事務スペースを犠牲にしなが懸念に市民の利用に応えようとしている職員の姿には頭が下がる。

リクエストの増加は、確かにインターネットによるリクエストが可能になったことが表面的な要因であるが、特に多いのが週末であるという。これは休日にまとめて制限冊数いっぱい借り出したいという利用者が押し寄せるからで、彼らは事前にインターネットで予約をして自家用車で受取に来るのである。週末の利用は、平日働いている人間には当たり前だし、子どもの本はすぐ読み終わるから、まとめ借りることができれば効率もよい。

しかし、本当にそれでよいのであろうか？ そもそも、週末まとめて自家用車で借りに来るとするのは、身近に図書館がないからではないか？ 日常生活動線上に図書館があれば、通学範囲に図書館があれば、週末まで待たなくとも何時でも、読みたくなったら読めるではないか。それは贅沢なことではない。知りたい、見たいという人間の本能に基づく行為であるし、些細なことから、地域の暮らしに関わる情報、地方自治にかんする情報、教育、福祉に関する情報、そして「本を読みたい！」「何か読みたい！」という欲

求を満たす為に、公共図書館はあるのではないか？ そう思うと、町田にはまだまだ図書館が足りないと思う。財政難もあるかもしれないし、昨今の社会情勢では新館をもっと増やして1中学校区に1図書館は無理かもしれない。当分の間、現状に目をつぶるとしても、本来あるべき姿はどうか、これを市民がしっかりと考えるべきであろう。利用者がもっとこうあって欲しいと要求し続けることが大切ではないか。そうしないと職員の努力も報われないだろう。

今ある便利な公共サービスをどうしたら次の世代に残せるか？ 恩恵を受けるだけではなく、それを支えて地域に受け伝えるためにも市民の意識が最も大切であろう。

最後に、先日訪問した日野市立日野図書館について少し紹介したい。

JR 中央線日野駅近くの甲州街道沿いにあるこの地域館は、まさに地域のコミュニティとなっていた。400 m²、2階建て、職員3名のこの図書館では、図書館としての基本的なサービスを行いつつも、職員が市民と「日野宿発見隊」なるものを結成し、勤務時間外に地域の人たちの中へ出向いて行き、交流を深めながら、ついには『写真集まちかど写真館in日野』（日野宿発見隊編、日野市、2009年刊）を発刊したのである（町田市立中央図書館に地域史料として収蔵）。

「日野宿発見隊」は、旧日野宿の姿を残そうと、古くから住むお宅へ訪問インタビューをしたり古い

写真を収集したりしながら、昔と今の現状の確認を行いつつ、形としてまとめあげたのである。そのコーディネートをし、地域コミュニティの場となったのが日野図書館で、この活動を通してまさに市民の中にある図書館となったのである。

市民が気楽に訪れ、閉館後もコミュニティとして解放される図書館。勿論、そこには市民の図書館とは何かを良く理解し、公務員として市民に何が出来るのかを自覚した職員がいればこそ、可能なのである。図書館は人的サービスである。そして、地域の中にあり市民の隣にある図書館こそ、地域のコミュニティとして、地域の活性化や人々の交流の場として役立つのである。この様な図書館が全国に増えればと思うし、町田にもそのような地域館がもっともって欲しいのである。「貸出」は図書館の基本であるが、そのみならず、市民との関わりを積極的に求めていく図書館には市民もまた応えるのである。地域館こそ「市民の図書館」なのである。

町田には 42 万の人口で図書館が6館あるが、5館ある地域館は大きさが全く違い、規模の小さい館はこのまま増え続ける利用者の要求に十分応えられるのか？ 不安である。利用が増えればこそそれに応じた規模の図書館が欲しいし、生活動線上の身近な図書館を求めれば、6館では全く足りないのである。

（やまぐち ひろし：会員、図書館協議会委員）

第6回町田市立図書館協議会 <開催日：2010年3月23日火曜日 9:30～11:30> 報告

1：館長報告

①3月市議会定例会報告

* 図書館嘱託職員に関して/議員質問にて、勤続10年の嘱託職員(30名)が非常勤のままが良いのか？ 司書資格者や専門性のある人は常勤と同じではとの指摘あり。

* 移動図書館の経費についての質問 * 貸出冊数についての質問

②第二次子どもマスタープランと第二次読書推進計画について（説明：児童担当渡部氏）

庁内手続きは終了し4月より実施。第二次読書推進計画では、ボランティアの存在の重要性と、「子ども読書活動推進会議」（計画の実施と管理を行う）の設置を謳っている

③新年度嘱託職員採用の件/嘱託職員 15 名を新規採用

④市民センターの返却本の件（経過報告）

⑤町田ターミナルパーキングの割引の件（若干の利用あり）

2：諮問事項「町田市立図書館の運営理念と目標のあり方」

①答申へのスケジュール作り

③他自治体の状況も把握に努める

②町田市の図書館の概要と現状を把握

④問題点を確認し、検討へ



（山口 洋）

2009年 子どもの本をふりかえて ~

「どの本読もうかな？」

講師：広瀬恒子さん

(親子読書地域文庫全国連絡会・代表)

去る3月21日(日)、町田市立中央図書館6階ホールにて、恒例の広瀬恒子さんを迎えての表記講演会が行なわれた。これからの子どもの本の行方を探る上でも、この1年間の子どもの本の動向を総括するのは大きな意味がある。町田でのこの会は、実に20年近く継続されているようだ。日曜日の午後にもかかわらず、熱心な参加者は41名。有意義な2時間だった。

◆はじめに～子どもの本の周辺で

「子ども読書年」から10年たち、数字の上では子どもは本を読むようになってきているが、本の販売は21年ぶりに2兆円割れ。特に雑誌離れが進み、『小学5年生』『小学6年生』『マミー』など休刊。大阪国際児童文学館も閉館された。一方で、日本ペンクラブが、子どもの文学の可能性を探るということで「子どもの本委員会」を作り、金原瑞人氏が「日本YA作家クラブ」を発足させた。

今年は「国民読書年」となり、文字・活字文化推進機構の肝いりで「子どもの言語力向上のため、全国の小・中学校の図書館の蔵書を増やすこと、新聞を置くこと、教員養成課程に『読書科』を設けること・・・」というような事業計画も展開されようとしている。「言語力検定」も実施する。

この3月、公立図書館での日本初の児童図書館員として長年貢献してこられた小河内芳子氏が102歳で亡くなられたことも時代の流れとして感慨がある。ストーリーテリングの名手だった。

◆子どもの本の動向から

2009年の新刊総点数は前年度とほぼ同じ3,505点。その中で海外への出版391点中、韓国176点、中国77点、台湾50点、フランス23点等となっている。また、アポロ月面着陸40年、「種の起源」のダーウィン生誕200年、ガリレイ天体観測400年目などの他、皆既日食などもあったので、節目に応じたNF(ノンフィクション)の出版もあった。

その他、軽装、文庫版のシリーズも多かった。

「21世紀版少年少女日本文学館」全20巻(たけくらべ・山椒大夫・坊ちゃんなど所収)、「わたしの古典」全11巻(古事記・更級日記・雨

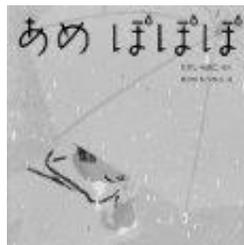
月物語など所収)など古典の復刊が目についたのは、文科省が打ち出したことに対する資料提供の面もあると思われる。

今の子どもも手が出せそうな本で、子どもたちの朗読も目立つようになってきた。

また、1960年代に創作児童文学を切り開いた人達の作品『ほろびた国の旅』(三木卓)や『はらっぱのおはなし』(椋鳩十)『だってだってのおばあさん』(佐野洋子)や、海外のものでは『アイラのおとまり』『フランバーズ屋敷』のシリーズ、『からすが池の魔女』など多岐に亘る復刊が見られる。格差社会が進み、若い世代に希望や展望が見い出せない今、作家自身も展望が見え難くて苦闘している。片や児童文学が児童文学たるゆえんは、その中に展望が描かれるからであり、それがためにかつて一定の評価をされたものが甦るのかもしれない。復刊であっても子どもにとってはいつも新刊。「黒魔女さん」「若おかみ」シリーズは相変わらず子どもに人気がある。

◆分野別の紹介 ~ 絵本

絵本の点数は1,434点で、全体の40.9%を占める。幼児向けでは、擬音やリズムを楽しむ『あめ ぼぼぼ』(くもん出版)や『かくかくしかく』(童心社)、泣き虫のあつくんを泣きやめさせようとする



『あめふり あつくん』(佼成出版社)等の他、『うしはどこでも「モ〜!」』、『100かいだてのいえ』、『ホーホー!きれいだなミミズクのいろのえほん』、

『バルバラさん』、『きりのなかで』、『ボールころげて』等あり、これらの中で『しろくまちゃんのほっと



けーきーてんじつき さ
わるえほんー』(こぐま
社)は、視覚障害のあ
る子どもも楽しめる。昔
話や行事絵本としては、
『ふしぎなしろねずみ』
(岩波書店)、『1つぶ

のおこめーさんすうのむかしばなしー』(光村教育
図書)、開けてはいけない袋の中身が変わる『ふく
ろのなかにはなにがある?』(ほるぷ出版)、絵の
タッチは中国風だが日本の創作『トン・ウーとはち』
(講談社)、36 龍をどのように作ったかを通
して農耕の祈願が伝わってくる『雨をよぶ龍ー4 年
にいちどの雨ごい行事ー』等がある。

また読後感のよい作品としては、フランスが舞台
の『水曜日の本屋さん』(光村教育図書)、マンション住ま
いのおじいちゃんが植物の
絵を描く『おじいちゃんとテオ
のすてきな庭』(あすなる書
房)、植物を愛した人の温か
さが伝わる『大きな木のような
人』(講談社)がある。平和への

願いをこめた作品としては、“やめて”の文字し
かない絵本だが、あるページから色調が変わるユニ
ークな『やめて!』(徳間書店)や、いつも境界
をたてるのは大人社会だと思わせられる『むこう岸
には』(ほるぷ出版)、『ともだちのしるしだよ』、
『少年の木』、センダックの『ブレンディバール』(徳
間書店)、地図の世界から空想の世界を広げてい
く『おとうさんのちず』(あ
すなる書房)等。

写真絵本では、クモが
糸を張る過程が美しくわ
かる『クモのいと』(ポプラ
社)、写真の力を感じる
『雪の結晶ノート』(あすなる書房)、『モズ』、「ほね
ほね」シリーズ、セラピー犬を通して病棟の子ども
と家族に寄り添った視点を追求した『わたしの病



院、犬がくるの』(岩崎書店)、赤ちゃんが生まれて
から1歳までの『おめでとうーたいせつなあなたへ
ー』等がある。『せかいをみにいったアヒル』(徳間
書店)は復刊されたが、古い感じは否めない。

絵本の作品として、動物を擬人化したものが多いが、
ふつうの子どもを主人公にした生活実感のこもったス
トーリー性のある作品がもっとほしい気がする。

◆分野別の紹介 ～ 読み物

①低～中学年のものは、文学 868 点中、448 点。

絵本の分野が台頭してくると、文学として幼い子
の物語は生まれにくく、絵本にとってかわられた感
がある。主人公の魅力や存在感のある作品が弱い。
その中で、「1ねん1くみ」シリーズは健闘して
きたが、全 25 巻で完結した。「魔女の宅急便」も 6
巻で完結。文と絵がよくマッチした本づくりのセン
スのよさでは、『クツカタツポと三つのねがいごと
ーチュウチュウ通り 2 番地ー』(あすなる書房)、読み
物として品格がある『グラタンおばあさんとまほうの
アヒル』(小峰書店)、挿絵が
うまく内容がユーモラスな『し
ょうぼうしょは大いそがし』(徳
間書店)、「いぬうえくん」シ
リーズ」等。



②中～高学年は、NF が活発。特に動物と人間の関わり合
いをテーマにした作品の中で、
犬・猫など 30 万頭が“処分”されている事実を描き、
作者自身もガス室のボタンを 30 回押したという『犬
たちをおくる日ーこの命、灰になるために生まれて
きたんじゃない』(金の星社)が異色で、この現実
をストレートに知らせることが論議を呼んだ本。

③高学年～YA(ヤングアダルト)は 410 点出版。創
作の書き手の世代交代が進み、新人のデビュー
も相次いだ。『ぼくとあいつのトライアル』(川上途
行)、『チームふたり』(吉野万里子)、『サナギの
見る夢』(如月かずさ)、『時間割のむこうがわ』(小浜
ユリ)、『バターサンドの夜』(河合二湖)等。一方で、
ベテラン岩崎京子の『建具職人千太郎』、『花の
お江戸の朝顔連』、『花咲か』なども元気だし、新
鮮さと展開の面白さがある本として『かりんちゃん

十五人のおひなさま』、『テレビのむこうの謎の国』、また厳しい自分の現実の中でもどこかに足をかける場所を見つけ歩き出そうとするところが評価できる『反撃』や『六月のリレー』、『園芸少年』、明日につづくリズム』等。

また海外作品では、子どもの生命力への信頼を失わないところがすごい『ジェミーと走る夏』(ポプラ社)、『ロジーナのあした』(徳間書店)、家を助けるため男装して仕事をするバングラデシュの話『リキシャ*ガール』(鈴木出版)、『ぼくだけの山の家』(偕成社)、『ビーバー族のしるし』(あすなろ書房)等。

『獣の奏者 探求編・完結編』(講談社)は、自分の生き方や、家族・国とのスケールの大きい問い



を投げかけていて、さまざまに広げ読みができる。

他に、図書館に関係した本として、『親愛なるブリードさま—強制収容された日系二世とアメリカ人司書の物語—』(柏書房)や、『図書館ねこデビュー—町を幸せにしたトラねこの物語—』(早川書房)、

実話に基づいた感動的な『トマスと図書館のおねえさん』(さ・え・ら書房 2010年刊)も紹介された。大人も読みたい本として『学校では教えてくれない本当のアメリカの歴史 上・下』(あすなろ書房)などもリストアップされた。

講演終了後、何人もの参加者が前に出て来て、揃えられた図書館の本を手にとり、児童書談義に花が咲いていた。

(報告:立川おはなしボランティア 大塚佳苗)

リレー・エッセー

「コドモ」と「ドクショ」

町田市役所いきいき健康部付
(派遣先:南多摩保健所)

菊地仁幸

半になる上の子は絵本のストーリーというよりも、絵本にでてくる「くま」とか「たいよう」とかそういったものにしか興味を持ちません。1歳になる下の子となると、絵本を「めくったり」「やぶいたり」で喜ぶ始末、読書とは直接関わりが無い様にも思えます。

冒頭で「読書」とは、本を読むことと調べましたが、単に本を読むことが「読書」ではなく、読書を通じ、その作者の考えや、でてくる場面を想像し、想いにふける・・・そこには新しい考えや新しい世界との出会いがあり、新しい自分とつながっていく。これまで「読書」というものについて考えたことはありませんでしたが、そんなものかなあとと思います。

先日、上の子と一緒に、近くのコンビニへ買い物かてら散歩していました。夕方日が沈み、辺りが暗くなってきたころ、子どもがふと「たいようがねちゃったから、くらくらったのかな」なんて話をしてきました。確かに、読書を「本を読むこと」と理解した場合でも、「本」といっても様々あり、文字のみで構成されているものもあれば、絵のみで構成されているものもあります。また、「読む」といっても文字にも平仮名もあれば漢字もある、抽象文字ともいうように絵や形から作られているものもあります。さらに、絵や形を認識する上では見ることも触れることはその前提ともなります。

子どもの話から、私が読み聞かせていた絵本のストーリーが思い浮かびました。子どもは、ストーリーについて興味を持っていなかったのではなく、しっかりと理解していたようです。何気なく遊んでいるようにしか見えませんが、「子ども達もしっかりと読書しているのだなあ。」と嬉しくなりました。

「読書」について携帯で調べてみたところ、「読書」とは本を読むこと。「読み書き」とは、文字や文章を読むこと書くこと、と出ていました。ここで私は、言葉遊びをしているわけでもしたいわけでもありませんが結果として、

ところで、私には子どもが2人います。今、読書という私にはもっぱら絵本の読み聞かせです。2歳

韓国から有名な絵本作家をお迎えして 中学生と交流

水越規容子

都立高校入試が行われた2月23日(火)、成瀬台中学校図書館に韓国からお客様がいらした。それは、韓国の地方の伝統的な生活風景を描いた『マンヒのいえ』などで有名な絵本作家 クォン・ユンドクさん一行。クォンさんの新作絵本『花のおばあさん』の読書会が、すでに進学先の決まった3年生33人を対象に開かれたのだ。日韓の児童書出版社の編集者や通訳も一緒に、『花のおばあさん』の読み語りを聞いた後、それぞれ感想などを出し合い、また作者のクォンさんも、この絵本を描こうと思った意図やいきさつ、絵に込めた思いやねらいなどを丁寧に説明して下さり、とても貴重な時間を過ごすことができた。太平洋戦争を題材にしたやや重い内容の絵本ではあるのだが、参加した生徒がみな率直な意見や疑問を述べてくれて、とても参考になったと喜ばれた。生徒全員がそのあとすぐに感想を書いてくれたのだが、ここに一部を紹介する。

* 僕は話を聞いて、こんなことがあったんだと初めて知りました。しかもこの話は日本人がしたことでした。当の日本人の僕たちがこの暗闇の歴史を知らないのは恥だと思いました。こういう歴史はまだ他にも数多くあると思うけれど、まずは一つひとつ知っていくことが大事だと思います。だからこの話を聞いてよかったです。今回は戦争が元となり一人の人生を狂わせてしまう話だから、戦争はいけないものだとつくづく感じました。今までは戦争といったら日本に落とされた原爆、東京大空襲など日本の被害の多い戦争を考えがちですが、その前に日中戦争や日露戦争など日本が相手に与えた被害を考えるのも大事なことだと思いました。(男子)

* 私はこの絵本を読んで肉体のない体が描かれていたことに驚いた。それは日本の制度によって性的暴行をやるほかに道がない兵隊の象徴であるということを知った。被害者はもちろん女性達であるが、私はそれよりも兵隊達に関心を持った。以前は兵隊は悪だと思っていたが、彼らも戦争を引き起こした一部の権力者に洗脳され動かされているコマでしかないの

かもしれない。戦争によって生じる犠牲者の多さも、今回の絵本を読んで改めて考えさせられた。(男子)

* 私はこのお話、事件をはじめて知りましたが、今までこんな重要なことを知らずに生きてきたんだと感じ、悲しかったです。もっとこのような話を普通に話すことができる社会が昔からあればよかったのにと思いました。きっとこの世の中にはまだまだたくさん、このことを知らない人がいます。ですからもっとたくさんの人に知ってもらい、これからの社会でこのようなことをなくしていき、また起こらないようにしていかなければならないと思いました。今日このお話を聞くことができ本当によかったです。(女子)

* 僕は戦争の表面ばかり見てたんじゃないかと思っています。それは普通当たり前です。パズルのピースがあったとして、普通パズルは表にしてやります。それを裏返してやったことがある人はいるでしょうか？表面では絵のつながりを見ていたものを形でやるということで、また別の考えが見えてくるのです。表でしか見えないことと裏でしか見えないこと。そういつてしまえば表と裏の関係は絶たれます。しかし現実には表と裏が絡みあって存在しています。戦争は悲惨だといわれますが、現にそれで得をしている人もいるし、戦争を渴望している人もいます。そんな表と裏の中で生きていく人たちの姿をもっと考えていきたいと思います。(男子)

数年前までなら必ず社会科で取り上げられたかもしれない「従軍慰安婦」の問題が、すっかり教科書からの記述も消え、参加した生徒のうちこの問題を知っていたのは僅か1名に過ぎなかった。みな様にはじめて聞いたと驚いていたのが印象的だった。内容もさることながら、一つひとつの絵にどのような思いを込めて描いたかをクォンさんが丁寧に説明してくれたことで、絵本を作る・描くという仕事への真剣な取り組みが伝わる時間ともなった。クォンさんはじめ、韓国からいらした編集者のみなさん、ありがとうございました。卒業していく生徒たちへの、なによりのはなむけの時間を持ってました。(会員)

今年2月27日、「やさしく読みやすい本」が読書の扉をひらく！～知的障害・自閉症のある人の読書環境を考える～というセミナーに参加した(148号参照)。そのセミナーの内容を踏まえ、今月から回数未定で連載してみたい。テーマは「知的障害者や自閉症のある人と読書について」。特別支援学校での勤務が3年目に突入したばかりの私は、今読書に関わる仕事をしているわけではない。いつの日か、本が大好きな知的障害者が思いのままに、読める本を手に行ける日がくることを願って！

「LLブック」とは何か？ LLとは、スウェーデン語の“Lättläst(らーとらすと)”の略で、「やさしく読める本」という意味。読書が困難な人達が、読書を楽しみ必要な情報を得ることができる本をさす。ただし、ただ分かり易ければいい、ということではなく、生活年齢や経験に応じた内容が分かりやすく書かれているということが重要だ。

つまり、高校生程度の重度知的障害者が、アンパンマンの本を親しんでいるのは精神年齢的によくある話。だが、生活年齢とはマッチしていないよね？ というアンバランスさに、LLブックは応えてくれるのだ。また、海外からの移住などの理由で、その国の本に親しめない人も、読書が困難な人達に含まれる。

余談だが、以前にペルーから移住してきた中学生の家庭教師をしたことがある。彼は日本語をなんとなく話すことはできるのだが、国語の教科書はものすごく難しい本だった。でも、漫画は好きで。当時は『ブリーチ』(ジャンプ連載/久保帯人)がお気に入りだった。今思えば、戦闘シーンばかりで、とくに長い会話もない。絵の動きだけで話が読めるから、意味がとらえやすかったのだろう。

漫画はLLブックではないが、LLブックが“やさしく読める”理由には、イラストや写真の多用という手法があげられる。文字でわからなければ、ヴィジュアルに訴えればいいのか。そういう観点からすれば、知的障害者や海外から移住して間もない人などが、漫画を好む理由というのはよくわかる。特別支援学校では、写真教材やイラスト教材をよく使う。視覚支援というのだが、何も文字をたたきこんで、文字によって教えなければいけないということはないのだ。文字や単語がわからないのならば、写真

やイラストを使えばいいだけのことではないか。

あなたが知らない言語の国を旅行するときのことを、想像してみてください。レストランに行くと、メニューをみるときに。読めない文字が並んでいるのと、料理の写真があるのでは、どちらがオーダーしやすいだろうか。地図の中で、お手洗いがシンボルで書かれているのと、読み方もわからない現地の言葉で書かれているのだったら、どちらが探しやすいだろうか。LLブックの“やさしく読める”という“やさしさ”は、そういうやさしさに通じている。

【参考文献】藤原和子・服部敦司(編著)『LLブックを届ける』読書工房、2009 一次号につづく(会員)

小河内芳子さんのご冥福を祈って！

増山 正子

3月3日、児童図書館員の先駆け小河内芳子さんが102歳で逝去された。そのことは何日かたって知った。偶然にも散乱した資料の中に小河内さんからの絵葉書を見つけ、懐かしく読み返していた日と重なる。葉書には、97・7・12の消印があった。

「お手紙いただきました。文庫の写真についてひと言。棚板が少し薄くはありませんか、本をつめると曲がりませんか、また本はあるだけ全部並べればよいかといえませんが、絵本は、表紙を見せておけるよう棚板前方下にサンを打って並べてみて下さい。よく見られるもの、みられないけれど見てほしいものを並べ、それが借りられたら複本をおけるような配慮もできるといいですね。子どもたちが並んだ本をみて手にとるように心がける事が大切でしょう。並べ方など図書館員にきいて下さい。棚にはギシギシつめないで、余裕もっておき、間にはお人形などおいてもいいでしょう。暑くて暑くて汗流しつゝ」。

屋根裏に作った我家の文庫開きに、小河内さん、浪江虔さん、広瀬さん達に来ていただき、仲間らにお話をしてもらった事がある。その時出した返事…?

遠野の世界民話博で一緒に語りをした時の事、私の故郷香川出身の村山籌子没後50年に、作品集を出そうと奮走してくださった事、同居されていた甥ごさんが亡くなられて故郷桑名に移られる時、小金井の文庫の整理を手伝った事(その際頂いたたくさんのお手紙や手袋人形は今も活躍中)、それらが、その時々にお会いした小河内さんの飄々とした優しい物言いと、柔和な顔に時たま射るように浮かぶ鋭い眼差しとともに忘れられない思い出となった。合掌



ひろば

<3月例会報告>17日(水)
16:30~会報148号印刷
伊藤、島尻、丸岡、増山
18:00~20:20 例会
於・中央図書館中集会室

出席者:石井、伊藤、片岡、久保、斎川
高橋、鈴木、手嶋、増山、丸岡
水越、守谷、山口、

- 今年度の会費未納者の確認
- 「風のかたち」(3/14 実施)上映結果報告。参加者138名(一般参加者117名、小学生5名、中学生1名、出演者2名、スタッフ13名)
- 会報について/巻頭言:今号は、図書館協議会で町田市立図書館を視察されて感じたこと等を山口さんに、次号は、長年町田の図書館職員としてレファレンスを担当、この3月で定年を迎えられて悠々自適の生活に入られる松野さんに、図書館の専門性について書いていただく。
- 知的障害児、自閉症児の読書についての取組みのシンポジウム等を報告(鈴木)され、会報で連載して下さることに。(p7)
- 公立図書館の指定管理者が学校図書館へも職員を派遣するなど、関係が密になるケースがたくさん出てきている。直営の図書館も取り組まなければならない問題だが、非人間的な人件費と図書館労働者の献身で成り立つ指定管理者制度の本質を多くの人に見極めてもらわなくてはならない。
- 3月21日の広瀬恒子氏講演会(p3参照)は、連休と重なってPRに努めた割には参加者が少なかった。これからは図書館との共催にしたい。
- 図書館と共催で図書館を使う時は根拠が要る。そのため、図書館では市民と共催する案件についての取りきめを作った。共催事業が儲けを目的としていないか、資料代をとるのはどうなのか、様々な条件について吟味しなければならない、などの意見が出された。
- 中央図書館20周年について/市民も参加して20周年をお祝いしたい/市民との関係の在り方をきちんと示すことができるよい機会だ/すすめる会が他団体などに声をかけるなどして動いては? 市民の団体で実行委をつくるというのはど

2010年度 第2回 文学館(主催)で楽しむ

おとなのためのおはなし会

5月20日(木)10:30~11:30

町田市民文学館 2F大会議室

プログラム

- * 町田ゆかりの作家「下村照路」 竹本すみ子
 - * 舌切りすずめ(日本の昔話) 濱田あい子
 - * 影取り池(町田の民話) 小山千鶴子
 - * アマガエルのおわび(花鳥賊康繁作) 神保俊子
- <語り:まちだ語り手の会>直接会場へ!



お? /参加呼びかけは図書館のほうから? 市民のほうから? 等等活発な意見が出た。

- 4年後をみすえて、市民が望む図書館政策を市政に盛り込んでくれる市長候補を応援しよう!
- 都立図書館協力貸出し/都立にあるのに借りられず、他県から借りなくてはならぬ現状/アンケートから市町村の図書館職員の苦労が伝わる/都立図書館としての存在意義はどこにあるのか。
- その他/朝日新聞3月13日付に「公務委託見直し」の記事。なんでも民営化にかすかな歯止めが始まっている? /野津田雑木林の会から 夏休みの皆越ようせい氏の講演会を図書館との共催事業にしたいので依頼書を提出する。

◆例会:今年度も第3水曜日 18時から中央図書館6F 中集会室で行います。変更の場合は、お知らせしますので、時間の許す限りご出席ください。

◆ひらこう! 学校図書館 第14回集会/6/5(土) 10:30~16:30/日本図書館協会2研修室(中央区新川1-11-14)/500円/片山善博氏(元鳥取県知事)講演「地方分権と図書館一問われる自治体の力量」/報告:「杉並区学校司書配置運動の成果と課題」専任司書がいる学校図書館を実現する会 in 杉並/問:042-389-6809/申込4/25~Tel& Fax 03-3816-5271 メール gongon3254@gmail.com/氏名・都道府県名・所属・連絡先必要/主催:学校図書館を考える全国連絡会

■あとがき■

新年度を迎えた。図書館の未来に不安がよぎるほど、図書館員として力を発揮していた団塊の世代が全国的にも次々と定年となり去っていく。そんな中、手嶋さんや川上さんの図書館再任用が決まりホッとしている。まだまだ、図書館のために働いてもらいたい。今年は国民読書年、そして11月30日は中央図書館開館20周年。職員と市民の協働で何ができるか、今から楽しみである。(M⁴)